

【翻訳】

宮村タネ「ヴァッサー大学―日本への報告」

Miyamura, Tane, "Vassar College: A Report to Japan"

山口 ヨシ子 訳

（凡例）

\* 元々はMiyamura, Tane, "Vassar College: A Report to Japan," *Vassar Quarterly* 16.1 (1931) : 29-37. (ヴァッサー大学新聞・雑誌アーカイブ <https://newspaperarchives.vassar.edu/>) の全訳である。

\* 本文最初のページの欄外に「『ヴァッサー・レビュー』より転載」とある。『ヴァッサー・レビュー』に掲載された原文は未見。

\* 『ヴァッサー・クォーターリー』目次の次ページに記された筆者紹介には「宮村タネ 一九二八年にヴァッサー大学二年に編入、現在、四年。東京の津田塾を卒業（同塾ではヴァッサー大学を一九一六年に卒業した山田琴が教鞭をとっている）。北海道札幌出身」とある。

\* 文中の「」内は訳者による。

アメリカという国へ足を踏み入れた瞬間から、新しい世界のページが私の目の前に開かれた。その新しい本のどのページも、私は尽きることのない興味をもって読んでいる。新しい本が故郷に残してきた古い本と似ていて、ときに衝撃を受けることもあるが、ほとんどの場合は、その違いに圧倒されている。新しい本でもっとも興味深いのはヴァッサー大学だ。

ヴァッサー大学は、「民衆の後援者になり、後世まで残る施設に自分の名前を付けたい」と強く望んでいた、エール「ビル」製造業で巨万の富を築いたマシュー・ヴァッサーによって、一八六四年に創立された<sup>(1)</sup>。この大学は、アメリカ最初の女子高等教育機関ではないが、「大学の教育基準を維持するのに十分な施設と教育基金を備えた」アメリカ最初の女子大学とい

う榮譽に浴している。

ヴァッサー大学は、ニューヨーク市から七六マイル「約一二三km」離れた、ハドソン川沿いの古い工業都市ボキプシー市の郊外にあり、一〇〇〇エーカー「約四〇〇ha」の敷地を有している。キャンパスは、自然美と人工美とを兼ね備えて、たいへん美しい。キャンパスの東側には、なだらかな丘陵が広がり、そのふもとには湖もある。春には、緑のビロードで覆われたこれらの丘に水仙やリンゴの花が咲いてその姿を透きとおった湖面に映し、あたりは芳しい香りで見せてくれるようになる。春の美しさをこれほど贅沢に見せてくれる場所にはほかにない。キャンパスの北側には、種々の運動競技やトラック競技に対応できる大きなグラウンドがある。グラウンドの周りは花壇で縁取られ、さらにその周りを松の木々が囲んでいる。一か所は、ヌマヒノキの背の高い生垣で仕切られている。ここでは植物の生育期間中ずっと多様な花々を楽しむことができる。鬱蒼とした森がキャンパスの西側を覆い、小鳥には自然の聖域を、リスには遊び場を提供している。この森からさほど離れていないところには、古い英国花壇の配列を模倣して作られた、シェイクスピアに捧げられた

庭園があり、彼が言及した多様な植物が植えられている。庭園を流れる小川のそばには、一本のシダレヤナギがあり、行き来する人たちを魅了するとともに、オフィーリアの悲話を思い起こさせてくれる<sup>2)</sup>。シェイクスピア庭園のそばには、自然の丘の斜面を古代円形劇場のように活用し、木々や湖を舞台の背景として半円形に利用した野外劇場がある<sup>3)</sup>。キャンパスには、オーク、カエデ、松、ヒマラヤ杉、モミの木など、立派な木々がたくさんあり、最高の風景画法の技術をもって配置されている。木陰のある小道がキャンパスを縦横に走り、多種多様な建物のあいだをつないでいる。

キャンパスには、図書館、科学棟、音楽ホール、保育園のような教育施設や、チャペルや保健室、学生会館、クラブハウスといった交流施設など、あわせて四〇以上の建物がある。約一一五〇人の学生用に、大きな寮棟が八つあり、いくつかの教員用の住宅や多様なサポートを提供する事務関係の建物もある。これらすべての建物には最新の設備が整っており、これらのなかには真の建築美を誇っているものもある。切り立ったゴシック様式の図書館は、その尖塔が空高くそびえ、知の殿堂であることを存分に象徴している。チャ

ペルは、ノルマン様式の石造りの建物で、夕日がその美しいステンドグラスに長くとどまり、やがて闇が回廊を包むと、私たちを精神の世界にいざなってくれる。

敷地の広大さ、キャンパスの美しさ、いくつもの堂々たる建物、行き届いた寮の施設など、これらすべてが重なって、きわめて質素な日本の大学のキャンパスや建物に慣れていた私は深い感銘を受けている。一部屋、それも小さい部屋が、一時間はチャペルとして使われ、次には体育館として、別の機会には講義室として、ときには音楽室としてなど、一〇以上の目的のために使われる日本の大学独特の節約の工夫は、アメリカでは知られていない。日本の大学の教室では、椅子がきしんで音をたて、少し動いただけで壊れることも頻繁に起き、壁の割れ目から強風が思いのままに吹き込んで、勉強中の学生たちを震えあがらせること、しかし、私たちは生涯を通じて役に立つ、ある種の修練を受けていることなど、アメリカの人たちは知らない。アメリカでは、たいいていの建物が卒業生や大学と友好関係にある人たちから寄贈されたもので、アメリカの富が賢明に使用されていることを認めざるを得ない。日本で

もよく知られているジョン・D・ロックフェラー氏は、講義用の主要な建物を寄贈し、さらに自分の母親を記念して寮を建築し、その寮に母親の名前をつけている。<sup>(4)</sup>

ヴァッサー大学はその外観が素晴らしいものではあるが、大学のなかでの生活はそれ以上に素晴らしい。私がアメリカへ留学するにあたって、多くの友人がからさまに不信感を示した。日本で紹介されるアメリカの映画や小説は、たいいていアメリカの大学生活を華麗にセンセーショナルに描いたもので、その必然的な結果として、アメリカの大学生は勉強以外なんでもするというのが日本では一般的な認識となっている。ヴァッサー大学で二年以上を過ごした私が、日本の友人たちに、「みなさんの言った通りでした」と言うだろうか。「いえ、そんなことはありませんでした」と、私は自信をもって断言できる。「みんな大いに誤解しています。アメリカの学生たちは、映画や小説に描かれているように、ダンスやブリッジをしますが、そういうことは学生生活の他の多く場面に比べれば、取るに足らないということは知られていません」と。

アメリカでも、わが国の場合と同様に、学生はその

時間と労力の方を知識の追求に費やしている。大学へ入学する学生たちの動機がいかにも多様であっても、共通の関心は、学びたいという強い願望にあることが前提条件とされている。しかし、勉強する科目やコースについては、完全に学生たちの手に委ねられている。「人間は学ぶ必要のあるものに興味をもつので、興味は選択の基本となるべき」で、「必修、あるいは必須という語の適用は、大学教育のいかなる局面でも、そのような学修が別のやり方でもたらずかもしれない教育的価値の大部分を損ねる」という見地に立っているためである。ある女子学生たちにとっては、「自分たちが学ぶ必要があるもの」を見つけるのがきわめて困難な場合もあり得る。ある賢人はかつて、「人生できわめて難しいことは、真に何が必要なのかがわからないことだ。何がほんとうに必要なを見つけだしたら、人生における成功は半ば達成されたことになる」と述べた。なかには「学ぶ必要のあるもの」を強いられるべき人たちも、また存在するかもしれない。しかし、いずれにしても、選択の自由は現代の進歩的教育の基本理念であり、ヴァッサーは、この新システムをかなり早くから採用した大学のひとつである。

学修方法は、日本のそれとはきわめて異なっている。日本における講義形式とは異なり、こちらでは口述や討議が大部分を占めている。教授たちによる知識の詰め込みは、必修コース同様、好ましくないと考えられている。教授の主要な役割は、教科について学生たちに強い興味を抱かせることであり、その教科について学生たちが何を考え、何を勉強したかを表現できるように、有益な提案や批判を提供しつつ、導くことである。ほんのわずかの授業を除いて、一クラスの学生数は三〇人を超えることはない。一〇人以下のクラスもあり、一クラスの人数がそのように少ないクラスでは、一人ひとりの学生が教授とより密接に接し、より個人的な配慮や助言を受けることが可能になる。学生たちは、ひとつの授業の前に二時間の予習をすることが求められている。このことは、もし一週間に五科目一五単位時間履修すると、通常の授業時間のほかに三〇時間勉強しなければならぬことを意味している。レポートがときどき課されて、さらに余分な時間が必要になる。小テストや試験はきわめて頻繁に実施される。このように学生たちは勉強で非常に忙しく、何日も徹

夜することになる。比較的短時間に膨大な量を勉強することの避けられない結果として、勉強は、質というよりも量で、集約的というよりは網羅的になりやすい。学生の成績は、a、b、c、d、e、fで付けられ、最後のfは落第を意味している。各種の賞や優等賞が、勉強への意欲を鼓舞する目的で与えられる。これは私には、その本来の目的のために勉強できるほど十分に発達していないか、「知識こそが勉強それじたいの報いである」と考えることができない、日本では小学校だけで用いられている初歩的な方法のように思える。

学生たちを教室内の狭い空間に閉じ込めておくことが、ヴァッサー大学の唯一の目的ではない。ヴァッサー大学が真に育てようとしているのは、教室よりも大きな世界を、明瞭かつ明確に理解できる人間である。大きな世界の現実に目覚め、それらについて考え感じることができ、つねに「新しい選択を試し、新しい感動を探し求める人」、知識や理想を行動へ移すことができる人、知性と心情、身体とがバランスよく発達した人である。換言すれば、ヴァッサー大学の学生たちは、幅広い興味をもって多様な活動に従事する、健康で、

知的で、聡明な社会人になるべく訓練されている。こそが、ヴァッサー大学における夥しい数に及ぶ、授業外の学生活動を理解する鍵となる。日本の学生たちには馴染みがないような、いくつかの例を次のページに紹介する。

少し前に、東京の新聞に掲載された写真を見たひとりの女子学生から、その写真について説明して欲しいと頼まれた。学生服を着た若い日本人男性の一人が、悲しそうな笑みを浮かべている写真が、女子学生の好奇心を刺激したらしかった。その完璧な説明を受ければ、彼女がどのような論評をするかよくわかっていたので、説明するのにためらいを感じた。だが、彼女が強く説明を求めたので、共産主義思想の普及活動に積極的に参加したため、東京の大学を退学処分になった学生たちの写真である、と説明した。日本では、女性に参政権がないことや、日本の大学では在学中に政治活動が許されていないこと、社会主義や共産主義のようない新しい思想に深い興味を示すことさえも許されていないこと、そして、日本の政府や学校の抑圧政策はただ学生たちに「禁断の木の実を食べたい」という欲

求を燃えあがらせる結果になるだけだ、とも説明した<sup>(6)</sup>。その知識欲旺盛な女子学生は、私の説明を聞いて、予想した通りの厳しいコメントをしたが、それは許されないものではなかった。

アメリカでは、学生たちが勉学を怠らない限り、政治や社会運動に興味をもつてもなんら制限を加えられることはない。それどころか、大学は学生たちを鼓舞して公共の問題に興味を持たせようとしている。女性の参政権の拡大を記念して一九一八年に設立された「政治協会」があり、女性市民の政治的責任に興味を抱かせようと努めてもいる。時事問題についての公開フォーラムや討論会は、きわめて頻繁に学外の多様な政党の講演者たちによって主導されている。アメリカの大学では『共産党宣言』を人気小説のように気楽に堂々と読むことができる。<sup>(7)</sup>若い女性が、自ら社会主義者や共産主義者と称しても安全なので、先の質問をした女子学生が、日本に生まれなくてなんとうれしいことか、と激しい口調で言い放ったのも驚くことではない。

二年前「一九二八年」に実施された大統領選挙のこ

とは忘れることができない。選挙期間中の数週間、大学全体が異常な興奮状態にあった。教員も学生も支持する政党名を言明し、立候補者への熱狂的な支持を示す多様な方法を編み出していた。ポキプシー市の繁華街まで赴き、街頭で市民に向けて演説した女子学生たちもいた。熱烈な民主党支持者の、ある女子学生は、自分の帽子のいたるところにアルフレッド・スミスの選挙バッジをつけ、「私たちの素晴らしいアル」の支持者であることが誰にもわかるようにしていた。<sup>(8)</sup>この学生は、私を民主党支持者にさせようと必死であったが、他の女子学生たちが同じ目的で私の机の上に置いて行った他の候補者たちの写真やバッジを見るととつぜん激しく怒り出し、その後数日間怒ったままだったので、たいへん当惑した。最高潮に達するのは選挙の日で、大方の女子学生はアメリカの法定年齢である二一歳に達しないため、投票することはできないが、それでもなお、その強い興奮が冷めることはない。投票日の翌日の夜、選挙結果が公表されると、大学の三つの政党、共和党、民主党、社会党が一緒になり、勝利を収めた共和党を先頭にキャンパスを行進し始め、歌や叫び声、爆竹が静かな夜の空気のなかに鳴り響く。



このようなことが行われれば、わが国では警察官たちが見張り、干渉し、追ひ散らすのが一般的だが、そのような警察官はここには一人もない。バツジを帽子のいたるところにつけていた女子学生は、熱心に応援したにもかかわらず「アル」が選挙に負けたので、その惨めな失望から立ち直るに数週間を要した。

ヴァッサーの学生たちは、社会福祉活動もいくつか行っている。アメリカは富める国ではあるが、それでも貧しい人びとは存在する。富者と貧者との格差は実のところ次第に大きくなりつつある。自由と平等を提唱しているにもかかわらず、黒人は文字どおり見捨てられた人たちだ。ポキプシー市の人口構成には、貧しい人びとも有色人種の人たちも含まれていて、ヴァッサー大学の学生たちは早くからこういった人たちを支援してきた。学生たちは、不運な人たちのための福祉施設を、寄付することによって、または、実際に施設に向いてゲーム、裁縫、工芸、演劇、美術、こん棒体操などを指導し監督することによって、支援している。ある日の午後、私もこのような福祉施設のひとつで、娯楽や休養のために老いも若きもともに集うリンカーン・センターを訪問した。訪れた時に居合わせた

年少少女の一人はみな栄養失調で、なされるべき適切なケアがなされていないように見えた。だが、ヴァッサー大学生の元気のよい指導のもと、バスケットボールを始めると、子どもたちは、頬を紅潮させ、目を輝かせて、たいへんすばやく活発に動いていた。ある部屋では、子どもたちが布切れや綿を使って猫や犬を作っていた。ゆつくりときこちなくではあるが、それでもたいへん興味をもって縫っていた。ある少女は、作った犬を赤ちゃんの弟への誕生日プレゼントにすると言っていた。調理室では、リングがちょうどオーブンに入れられるところで、その周りには少女たちがたいへん心配そうに集まっていた。福祉施設でこれらのことが実施されている様子を見学し、ヴァッサー大学の学生たちは、なんと貴重な生きた教育を現場で受けることができるのか、と思わずにはいられなかった。貧しい人びとや虐げられた人びとに遊びや裁縫を教えることは、決して根本的な救済策ではない。実のところ、いくらよく見ても、表面的で、博愛主義的ではない。だが、どんな敵意のある批判がなされても、ひとつのことは確かだ。福祉活動によって若い女子学生が人生の暗部に直面し、そのことが人間性をより広く

深く理解するきっかけになるということだ。

ヴァッサー大学内にも雇用者のレクレーション用に組織されたクラブがある。学生や卒業生による寄付で運営されていて、学部学生は、学内雇用者の生活を少しでも快適にしようと、積極的に参画している。また、アメリカ国内だけでなく、外国への社会福祉にも実質的に貢献している。ヴァッサー大学の姉妹校として認定されている東京女子大学へは、二つの大学を結ぶ絆は金銭だけではないと思うが、毎年三〇〇〇ドルを寄付している。<sup>10</sup>

ヴァッサーの学生たちが深い興味を抱いているもののひとつに演劇がある。演劇や英語のスピーチの授業の一環として上演される劇に加えて、一八六五年に設立された演劇部や他の学生グループの主催でときどき劇が上演される。ほとんどの学生にとって、衣装を着けメイクをして舞台に立つことは、たとえ群衆の一人の役としてであっても、夢である。ヒーローやヒロインの役を与えられた女子学生は、全学の羨望の的だ。衣装、照明、舞台装置など、「舞台裏」の仕事はすべて「表舞台」のそれと同様、学生たちが担当し、たいはオーバーオール姿で挑む。演者が大学の勉強を

抱えている素人であることを考えれば、作品の出来栄はつねに卓越している。演劇の成功は、学生たちが自意識過剰でないことに多少は起因している。日本人女性はたいてい引込み思案で、自意識過剰なところが、身振りを交えることさえもできない。完璧なる患者はもちろんのこと、根っからの感傷的な恋人まで演じることができる女性たちは、私には驚異ではない。年に一度は、野外劇場で夜間に上演され、木々や湖、ときには月や星々などの自然の背景も、上演作品に加味される。この二年間には、日本の能の『隅田川』と『経正』という二つの作品が上演された。<sup>11</sup>アメリカの女子学生が日本の能を演じたのだ。当然ながら、本物の能の舞台を観ることは望めないが、アメリカの女子学生が、たとえ日本の伝統的な能舞台とはほど遠いものであったとしても、二つの能の演目を、完全に日本的なものとして立派に演じたことに、たいへん感銘を受けた。

学生たちの活動には雑誌や新聞の発行も含まれていて、すぐれた発行物に『ヴァッサー・ミセラニー』と『ヴァッサー・レビュー』がある。前者は隔週発行の



学生新聞で、後者は季刊の文芸誌だが、原稿集め、編集、配布、広告など、発行に必要なあらゆる業務は、劇上演の場合と同じように、すべてが学生たちによって運営されている。発行に直接従事している女子学生たちは膨大な時間を費やなければならず、支援不足に苦しむこともある。ユーモラスとはいえ、やる気を削ぐ、次のような批判を受けることもある。『レビュー』の悲惨な状態について関節的になる「はつきり意見を述べる」ときが来た。内容が薄く、ページの空白に知的な読者は呆れる。『レビュー』がたいそうばかばかしくなったので、その名前がラバに蹴られてしまった「文句を言われてしまった」のか。（その号の表紙にはラバが載っていた）光あれ！<sup>12</sup>。このような批判に答えなければならぬ担当の学生たちは、次のように述べている。「これは正当な理由を述べているのであり、弁解ではありません。・・・今回、提出された原稿があまりにも少なく、選択を最小限に留めなければなりませんでしたが、結果として、悲惨な内容だったかもしれません。大学として雑誌を所有しているか否か、その質がどのようなものであるかは、大学のみなさん

にかかっています・・・」。世間で広く知られている出版の苦労を経験しながらも、担当の女子学生たちは、自分たちの仕事に対して大いなる熱意を示している。大学生活や思想に有益な洞察を加える内容を読者に提供すべきであることや、批評力を養い、経営管理について学ぶ最高の機会であることを理解している。

「よく学び、よく遊べ」。ヴァッサー大学では、学生が実に熱心に勉強し、政治的活動、社会的活動、演劇などの諸活動に参加するが、よく遊びもする。アメリカの大学生たちにとって、スポーツは食べ物と同じくらい生活に欠かせない。各種の学校や大学の宣伝では、どのような種類のスポーツを提供できるかについて、必ず言及する。典型的な広告は、「認可されたレベルの高い大学。学士の学位を取得可能な各種コース。・・・大学はインディアナポリスの南西二時間に位置し、広大な敷地に囲まれている。敷地内の木陰の多い大通り、公園、庭園は、設備の整った校舎の魅力的な背景となっている。前オリンピックチームのメンバーが指導する水泳。卓越した馬術師範が監督を務めるクロスカン トリー馬術。大きな近代体育館。テニスコート六面。ホッケー競技場。手ごろな学費」とい

う具合である。馬に乗っている女子学生たちの写真が広告に差し込まれたりもする。スポーツが大学の大きな魅力のひとつとなっているとすれば、ヴァッサー大学は大いに誇るべきだ。現代では、どの学生の発達や資質にも不可欠と認められているスポーツを訓練するのに適した、素晴らしいキャンパスを備えているからだ。

テニスコート一四面、ホッケー競技場三つ、プールとゴルフコースは絶えず使用されていて、スポーツや激しい運動への関心が広く行き渡っていることを示している。ハイキング、乗馬、自転車も一般的な運動競技で、クラス対抗やヴァッサー大学と他大学とのテニス、ホッケー、バスケットボールの試合は一年を通じて行われる。冬には、多くの魅力的な丘陵や坂、湖が、スキー、そり遊び、スケートへと誘う。冬の光景で感動的なのは、星が冴えわたる夜に行われる、年に一度のスケートカーニバルだ。湖には照明が施され、冬の精がたくさん集まったように女子学生たちが音楽に合わせてスケートを続ける。スケートほど優雅な競技はない。このようなスポーツが学生たちにどのような点

で役に立つのか。綿密な分析が必要なことはあまりにも明白なことだ。ヴァッサーの学生たちの特徴である、心身ともに健康で健全な気風は、スポーツによって培われたところが大きい、と言えば十分であろう。

スポーツや運動が学生たちの娯楽時間のすべてを占めているわけではない。大学を卒業して日本へ赴き、女子大学で教えていた若いアメリカ人はかつて次のように述べた。「まあ、日本の大学は修道院のようで、学生たちは映画にも劇場にも行かない。若い男性の姿をキャンパスで見かけることもない。若い娘たちはひたすら勉強をするばかり。この女性たちが人生のよるこびを感じることはあるのでしょうか」と。日本人は、外国人によるこのようなコメントに慣れているので、穏やかにほほ笑んでいられる。日本の大学とは正反対のアメリカの女子大学を見聞いた後では、とくにそうである。「二人の人間が顔と顔を突き合わせて立てば、相手の左側と対応するのは右側であり、逆の場合も同じである。二つの国が対面するときも同じで、ひとつの集団で『正しい』ことが、他の集団では同様に『正しい』ことではない」。岡倉寛三氏がポストンで日本

について行った講演の、この冒頭の発言ほど、日本の女子大学とアメリカの女子大学との違いを見事に要約するものはない。日本人の生活に数世紀にわたって影響を与えた倫理的行動規範は、第一に「快楽は精神を破壊する」であり、第二に「男女七歳にして席を同じゅうせず」である。<sup>13</sup> 大方の古い因習が廃止された今日でも、この二つの規範は依然として日本人の生活にしっかりと刻み込まれている。映画やダンス、ブリッジ、小説に快楽を求めれば、趣味が悪く、望ましくならぬ性格だと思われる。ましてや、若い娘が、男性と付き合うことは言うまでもなく、男性について話したり、あるいは男性と話したりして、男性への興味を少しでも示せば、嘆かわしくも道徳が欠如している証とみなされる。学生が常識的で分別をわきまえていると高い評価を受けている大学でさえ、このようなふるまいは否定されている。それでも、若い女性の側にとくに不満や不便はみられない。学生たちは、読書をしたり、音楽、華道、茶道、裁縫のような、女性的と認知されている技術を習得したりして、余暇の時間を過ごしている。日本人のそのような「精神構造の特徴」に慣れているものにとって、ヴァッサーの学生生活は、当初、

驚きであった。ヴァッサーの学生たちは、少し時間ができれば、映画に行き、ブリッジをし、ダンスをする。週末は、ニューヨーク市や他の場所へ駆けつけ、「楽しい時間」を過ごす。週末のキャンパスは若い男性たちで溢れ、女子学生たちは、絶えず目を光らせる学寮長や付き添いもなく、若い男性たちと一緒にでかけ、ダンスをし、話すことができる。女子学生たちが不満を述べるように、若い男性のいない大学は尋常ではない。学生新聞『ヴァッサー・ミセラニー』の「キャンパスのおしゃべり」というコラム欄には、次のような詩がときおり掲載される。

マサチューセッツ州ケンブリッジにいられたらなあ  
そしてゲームをこの目で見ていられたらなあ  
ヴァッサーの今の生活は活気がないと思う  
オールド・イーライにいられたらいいのになあ  
私は自分の気持ちに忠実になりたい  
もしトムからの誘いがなければ  
終わりだ

または

私は、血の気が失せ、弱々しくなり

イエールに着く前に死んでしまうのでしょうか

それともゆつくりと爪を噛み

ウイリアムズタウンへの誘いを待ちましょうか

ケンブリッジ、<sup>(14)</sup> オールド・イーライ（イエール）、

そしてプリンスストンはみな男子校である。先の詩はもちろん、おかしさを狙ったものではあるが、女子学生たちの異性への一般的な関心を示している。

アメリカの学生たちのこのような嘆息に驚いてはいるが、私は、彼女たちを安易だと激しく非難する人たちに加担することはできない。品行方正な女子学生がとどまっているべき領域を超えてしまう、趣味の低俗さを示す、自由を有効に活用するというよりも悪用してしまう、というような例があることは確かである。しかし、批判のなかにはまったく責めに値しないものがあることも、認めなければならない。男女が七歳にして席を同じくしているアメリカでは、この習慣によって、男女が、同性の友だちと付き合うように、開放的に純粋に異性と交際する方法を学んでいる。した

がって、女性たちがあまりにも自由に男性たちとともに過ごすと、何か恥ずかしいことが起こると想像するのは性急にすぎる。結局、男性は人間の半分を構成しているのであり、ヴァッサー大学が育てようとしている真の社会人になるためには、女子学生は大学にいるあいだでさえも、男性から隔離されるべきではない。男性にも女性にも、のびのびと交際する自由が与えられることは、絶対に必要だ。日本では、結婚はたいがい家族によって決められ、娘の夫は、両親によって選択される。両親の経験は、娘の情熱よりも健全な判断力をもって、適切な結婚相手を見つけることができると思われている。結婚が完全な個人の選択の問題であるアメリカでは、結婚前に、友人として長く付き合うことは普通のことである。それなら、将来のことを考えなければならぬ女子学生が、在学中に男性に関心を抱くことは、許されるべきではないか。だからこそ、私は今、ヴァッサーで行われる二つの最大の社交的行事である、三年生、四年生のダンスパーティを大いに楽しみ、理解して見ることが出来る。四年生と三年生はこれらのパーティに兄弟や「恋人」を招き、大舞踏会を楽しむ。女子学生たちは優雅なイヴニングドレス

を身に纏い、ハイヒールを履いて意中の人と腕を組んで行進し、ダンスをする。その光景はたいへん美しく、誰もが詩人のように「青春の酒は甘美だ」と言いたくなる。

このように、ヴァッサーの女子学生は、勉強やら、さまざまな活動やらで、ヴァッサーの学生であることの特権を楽しみ、感謝しつつ四年間を過ごす。四年目の終わりまでには、バランスのよくとれた思考力、精神力、身体をもった女性、現実社会をはっきりと公正に見極める力を持ち、全身全霊で現実社会の要請や必要に応える力を備えた女性となる。つまり、ヴァッサー大学が目標とする女性になるのだ。

## 註

(1) 原文ではヴァッサー大学の創立を一八六四年としているが、マシュー・ヴァッサー(一七九二—一八六八)がヴァッサー女子大学を創立したのは一八六一年で、三五三名にのぼる女子学生が初めて入学したのは一八六五年である。マシュー・ヴァッサーはイギリス・ノーフォークのデアハムに生まれ、一七九六年に家族とともにアメリカへ移住した。一八〇一年からはじめたエール(ビール)製造業などで財産を築き、ヴァッサー大学創立のため土地や建物、基金などかなりの資産を寄贈し、エールによって自らの名前を歴史に残した。

(2) シェイクスピア(一五六四—一六一六)が一六〇一年ころに著した戯曲『ハムレット』四幕七場では、ハムレットの恋人オフィーリアがシタレヤナギの大枝に花輪をかけようとして枝が折れ、死ぬ様子が他の登場人物によって語られる。

(3) 古代の円形劇場では、中心にある舞台を囲んですり鉢状の斜面に観覧席が配置されていた。

(4) ロックフェラー(一八三九—一九三七)の母親の名はイライザ・デヴィソンで、彼女を記念して一九〇二年に建築されたヴァッサー大学の寮は「デヴィソン・ハウス」と呼ばれている。

(5) アメリカの大学では、一学期に五科目一五単位時間を履修するというのが標準的で、一科目三単位時間の授業では、

五〇分から一時間の授業に週三回か、一時間一五分から一時間半の授業に週二回出席する必要がある。

- (6) 社会主義思想や社会運動の抑圧を目的に一九二五年に制定された治安維持法の最初の発動は、一九二五年一月から翌年四月にかけて、京都帝国大学の学生を中心とする全日本学生社会科学連合会関係者に対するもの（京都学連事件）だった。その後、一九二八年三月一日に実施された日本共産党関係者の一斉検挙をはじめとする思想弾圧と言論統制が広範に行われるようになる。なお、このとき治安維持法とともに二五歳以上の男子普通選挙法が制定されたが、日本における女性の参政権獲得は一九四五年の敗戦を待たなければならなかった。アメリカで憲法修正第一九条「投票権における合衆国および各州の性差別禁止」が発効し女性の参政権が認められたのは一九二〇年のことである。
- (7) 『共産党宣言』は、共産主義者同盟の綱領としてカール・マルクス（一八一八—一八八三）とフリードリヒ・エンゲルス（一八二〇—一八九五）の二人によって起草され、一八四八年にロンドンで発表されたドイツ語の文書。最後に掲げられた「万国のプロレタリア団結せよ」という言葉はよく知られている。アメリカでは、アメリカ最初の女性大統領候補となるヴィクトリア・ウッドハル（一八三八—一九二七）が、一八七一年、姉妹で発行する週刊紙に『共産党宣言』の英訳を掲載した。なお、アメリカ社会党が結成されたのは一九〇一年、アメリカ共産党はその社会党か

ら分裂してつくられた共産党と共産主義労働党とが一九二一年に統一して成立した。

- (8) アルとは、一九二八年アメリカ大統領選挙における民主党候補アルフレッド・エマニュエル・スミス・ジュニア（一八七三—一九四四）のことで、公的にもアル・スミスと呼ばれた。主要政党の大統領候補として初めてのアイランド系カトリック信者であったが、共和党候補のハーバート・フーバー（一八七四—一九六四）に完敗した。なお、このときの大統領選挙には、共和党、民主党、社会党、共産党などから大統領候補がでている。

- (9) このような福祉施設は「セツルメント」と呼ばれ、ボランティアがスラム街などに定住して労働者、貧困者との人間的な交流をとおして援助し、自力による生活の向上を図ることを目的としている。オックスフォード大学で教鞭をとっていた歴史学者のアーノルド・トインビー（一八五二—一八三）が、ロンドンのスラム街にオックスフォード、ケンブリッジ両大学の学生たちとともに住み込んで活動を始めたのが始まりといわれ、「セツルメントの父」と呼ばれている。一八八四年、サミュエル・バーネット（一八四四—一九一三）牧師夫妻が早世した同志トインビーに因んで「トインビー・ホール」と名付けたセツルメントを開設した。アメリカでは、このトインビー・ホールを訪問し、影響を受けたジェイン・アダムズ（一八六〇—一九三五）が、一八八九年、シカゴに創設した「ハルハウス」と呼ばれる



セツルメントがとくによく知られている。アダムズは一九三一年にノーベル平和賞を受賞した。アメリカにおけるセツルメント活動には、大卒の女性が多く参加したといわれている。

- (10) 原文は「東京クリスチャン大学」で、女子大学であることが書かれていない。一九一八年創立直後にヴァッサー大学と「姉妹校」の提携をした東京女子大学を指していると思われる。

- (11) 原文では「まさつね」となっているが、能の演目とあるので『経正』だと思われる。

- (12) 「関節的になる (articulate)」とは、「はつきりものを言える (articulate)」という語をかけて、誤植が多いことを揶揄している。また「蹴られる (be kicked about)」には「文句を言われる」の意味が含まれている。

- (13) 岡倉覚三 (号は天心。一八六三—一九一三) は、一八九〇年から東京美術学校 (現・東京藝術大学美術学部) の初代校長を務めるが、一八九八年に解任運動で辞職、一九〇四年にボストン美術館東洋部に就任し、日本とアメリカを往来した。

- (14) ケンブリッジは、ハーバード大学のある場所で、学生の詩はハーバード大学を指していると思われる。また、マサチューセッツ州ウイリアムズタウンにあるのは、少人数でレベルの高い教育を施し「リトル・アイヴィー」と呼ばれるウイリアムズ大学 (一七九三年創立) である。一八世紀

に創立された多くの大学がそうであったように、当時は男子校であった。

英文の解釈及び註の作成にあたっては、出雲雅志先生より多大なるご援助をいただいた。ここにそのことを記し、心より感謝の意を表したい。

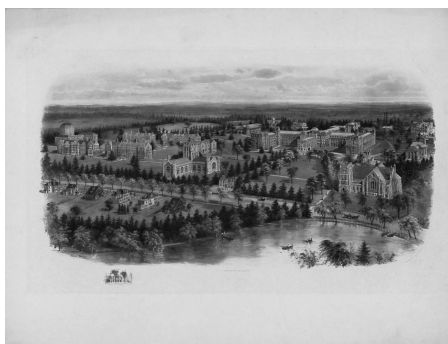


写真1 ヴァッサー大学全景（1907年）



写真2 ヴァッサー大学図書館（1900年）



写真3 ロックフェラー・ホール（1904年）